

教材研究の視点・資料の活用

- 1 基本的事項の把握

授業の成否は、どれだけ教材研究に時間を費やしたかにかかっている、といっても過言ではない。また、「10のことを調べて、そのうちの1を生徒に与える」のがよいとも言われる。どのような到達目標を持ち、どのような内容を、どのように教えることが生徒によく分かるか十分研究したい。

1 「学習指導要領」を熟読し、目標を明確に把握する

「学習指導要領」に示されている目標や内容、この単元で育てたい見方や考え方を十分検討する。「教科書を」教えるのではなく、「教科書で(主教材として)」教えることを銘記する。

2 教育内容の研究を深める

(1) 教科書と教師用指導書、副教材(図説資料集等)を熟読する

教科書を熟読し、教科書執筆者の意図を把握する。教科書に出てくる「用語」等は入念に調べ、生徒の質問に的確に答えられるようにしておく。教科書、教師用指導書、生徒の持っている図説資料集等も複数冊を比較参照することで要点が分かる。教師用指導書には授業展開上の留意点が記述されていたり、関連図書の紹介もあり参考になる。教科書は、早期に最後まで読み、その全体像を把握しておく。

(2) 中学校の社会科教科書を読んでおく

生徒の既存の知識を確認するためにも中学校の教科書を読んでおく。新教育課程になり、特に「地理」は用語・事項が減少し、技能・表現的学力を身に付けることが求められている。

また、自分が担当していない地理歴史科の他科目の教科書や、地理歴史科・公民科の内容と重なる部分もある国語(古典)、家庭科、教科「情報」の教科書も機会を見つけて読んでおく。

(3) 一般書籍を活用する

概念を理解するための辞書や専門的書籍と、エピソードや日常生活との関連を集めた書籍とを組み合わせることが大切である。最新の学説紹介やエピソード紹介は、生徒の意欲を高める。

(4) 身のまわりの「モノ」や「コト」を教材化する

教室にモノを持ち込むと生徒の興味・関心が高まり、講義一辺倒の授業形態を変えることができる。新聞やニュースで扱われた事件などの「コト」も生徒の関心を高める教材となる。

(5) 市販の学習参考書・大学入試問題集を参考にする

良質の大学入試問題を参考にすることで、授業で押さえるべき内容を確認できるとともに、授業構成の視点や考查問題作成のアイデアを得ることができる。

3 授業方法を研究する

「教える内容」の研究だけでなく、「教え方」の研究も重要である。良い教育内容も、生徒が身に付け、「生きて働く知識」となってはじめて価値が出る。教育関係図書を読むなどして、教育方法に関する知識や技術を身に付ける必要がある。

(1) 教材を取捨選択する

興味・関心を育てる教材、思考を深め、見方や考え方を深める教材、基礎的・基本的知識を獲得させる教材などを単元のねらいや生徒の実態を考慮し、取捨選択し、あるいは加工する。

(2) 教材を授業展開上に配列する

教材を生徒の既存の知識・経験、興味・関心を考慮して授業展開上に並べ、発問を作成する。また、生徒が活動する場面を作るなど授業形態を工夫し、板書計画やプリント資料も準備する。

- 2 プリント教材の作成

教育目標達成のためには、目標に合った資料をプリントなどにして用意する必要がある。興味・関心が高まり、資料活用の技能や表現力が身に付き、思考が深まり、また、知識が理解として定着するようなプリント教材を作成したい。

1 プリント教材を授業の全過程で使うのか、補充資料として活用するのか

授業の全過程でプリント教材を使用する場合と、黒板への板書を主にプリント資料を補助的に使っていく場合がある。生徒の実態等を考慮してどちらが効果的か判断する。前者はプリントに多くの情報を盛り込むことができ、後者は精選された板書事項とプリント資料とを併用することになる。

2 プリント教材の分類・内容構成

(1) 授業内容を構造化したまとめ

教授すべき内容を構造化し、分かりやすくまとめ直したもの。重要な部分を空欄にするなどしてあり、生徒が講義を聴きながら記入する。重要度の低い部分はすでにプリントに記述されており、進度を早めたり、より多くの情報を生徒に伝えるのに役立つ。

(2) 興味・関心を高めたり、思考を深化させたりする資料

教科書や副教材に掲載されていない資料や史料など。風刺画・漫画・写真・イラストなどは、生徒の関心を高めることができ、文字資料などは、生徒の思考を深化させることができる。

(3) 作業学習を進める資料

白地図による作業学習や読図、統計を読み取る学習により資料活用の技能が身に付けられる。

(4) 知識を定着させるための図やまとめの表、発展問題などの資料

3 プリント教材作成上の留意点

(1) 教材の精選

プリントに多くの「知識」や資料を盛り込みすぎると、生徒にとって学習が負担になったり、どれが重要事項かあいまいになったりする。生徒の実態に合わせて精選する。

(2) 単調な授業にならないよう多様な内容構成にする

教師が話す割合が多くなり、講義式の授業に陥りやすい。生徒も「プリントさえあれば大丈夫」「空欄の穴埋めだけでラク」といった意識になりがちである。

(3) 生徒の主体的な記述部分を多くする

空欄の穴埋めだけのプリントにせず、生徒が自分の言葉や模式図でまとめる部分を作る。

(4) 評価欄の設定

学習したことを確認するため、簡単な問いかけや感想欄を設定し、生徒に授業評価をさせる。

【コラム】 「ごまかし勉強」と「正統派勉強」

心理学者の藤澤伸介は、テストに出るところのみ学習する「ごまかし勉強」は「テストに出ない知識や要素」との構造化や関連付けがなされることがなく、既知の知識や自分の経験とも結びついていないため、テストが終わると獲得したはずの知識や要素が消失してしまうとしている（『ごまかし勉強』新曜社、平成14年）。また、「結果を出したい」という教師の心理や、「教科書からしか出さない」など試験範囲を限定したり、「要点プリント」の暗記を奨励したり、客観問題のみを出題したりする行動が生徒の「ごまかし勉強」を誘発しているとしている。

ごまかし学習（労役としての学習）	正統派の学習（新しい意味体系の獲得）
学習範囲の限定「これだけ覚えればいい点になる」	学習範囲の拡大「事典でいろいろ調べてみよう」
代用主義「（暗記カードなど）これを使えばいい」	独創志向「自分で要点をまとめてみよう」
機械的暗記志向「これだけ暗記すればいい」	意味理解志向「そうか、分かったぞ」
単純反復志向「とにかく何度もやる」	方略志向「どう勉強方法を工夫しようか」
結果主義「当たった、よし」	思考過程の重視「当たったがどうしてか」

- 3 世界史の教材研究の視点と資料の扱い

世界史は、時間的にも空間的にも幅広く学習させなければならないため、「広く・浅く」学習が進みがちであるが、常に、「その単元を教えて何を考えさせるか」を把握しておく必要がある。生徒の「なぜ世界史を学ぶのか」という問いかけに応え、歴史的思考力を育成したい。

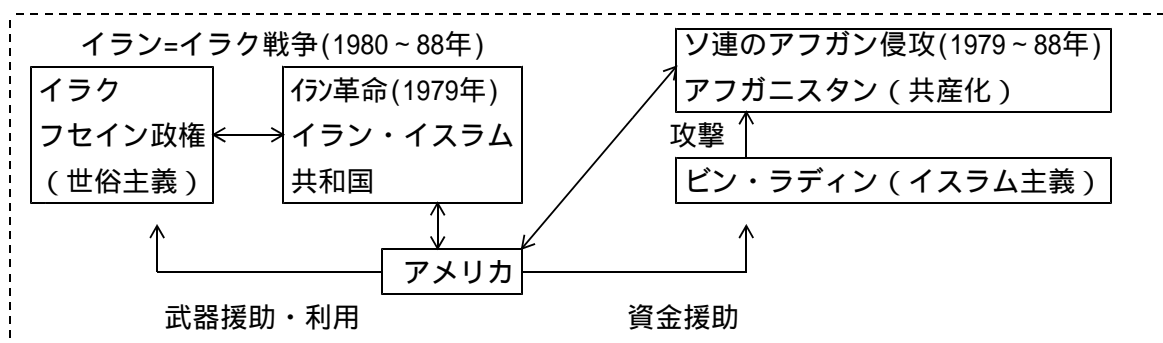
1 歴史リテラシー(Literacy)の育成

世界史の授業は、「広く・浅く」学習が進み、「過去の外国の出来事を暗記する」ものとなり、生徒の学習意欲を削ぐものになりがちである。しかし、生徒は「何のために世界史を学ぶのか(世界史を学んで何の役に立つのか)」「(強制連行や原爆投下、靖国神社など)一つの事実がなぜ各国で対立するのか」などの問いを抱いて授業に参加しているのであり、生徒のこうした問いに対して応えうる明快な姿勢を持っている必要がある。

歴史リテラシーとは、「歴史を読み解く力」「歴史とかがわる力」である。歴史は、客観的な過去の事実などではなく、「誰かにより合理的に(都合良く)作られた物語」とも考えられる。生徒は、多様な歴史(言説)とかがわり、自らの現代認識と歴史認識を作り上げ、それを自らの未来を形成するための糧にしていくのである。(原田智仁「歴史リテラシーの可能性(1)~(7)」、『中等教育資料』所収、平成14年12月~平成16年4月)

2 歴史リテラシーについて考える具体例(1)

「サダム・フセインとオサマ・ビン・ラディンは昔からアメリカの共通の敵だったか」



1980年代、アメリカは、フセインとビン・ラディンとを支援していた。イラン=イラク戦争とソ連のアフガン侵攻が終結することで、アメリカはフセインとビン・ラディンを援助する必要がなくなる。

フセインとビン・ラディンとは、背景思想が違うので、手を組むことは考えにくい、と言える。

3 歴史リテラシーについて考える具体例(2)

「日露戦争は、日本にとってやむを得ない戦争だったか」 - 『坂の上の雲』をどう読むか -

『竜馬が行く』(1880万部)、『坂の上の雲』(1190万部)など、「国民作家」司馬遼太郎の本はよく読まれており、日本人の歴史意識形成に多大な影響を与えている。

司馬遼太郎の作品の特徴	
・明治期の政治・社会を礼賛	大正時代以降、日本の政治・社会はおかしくなり第二次世界大戦という破局に向かった。
・朝鮮植民地支配の肯定	地政学上、やむを得なかった。

歴史小説を読むと、それがあたかも史実であるかのように感じるが、当然のことながら、脚色した部分やあえて取り上げなかった事実がある。歴史学会の見方などにより、検証する必要がある。

4 世界史における資料の扱い

資料には様々なタイプのものがあるが、教えたいことを的確に表す資料を利用することが大切である。また、一つの事柄に対して視点の異なる複数の資料を提示すると、客観性の確保だけでなく、生徒の多角的なものの見方を育成することになる。

(1) 統計資料の活用例

<世界恐慌中の各国の工業生産の推移 1929年 = 100 >

	米	英	独	仏	伊	日本	ソ連
1928年	93	94	99	92	92	90	79
1929年	100	100	100	100	100	100	100
1930年	81	92	86	100	92	95	131
1931年	68	84	68	86	78	92	161
1932年	54	84	53	72	67	98	183
1933年	64	88	61	81	74	113	198
1934年	66	99	80	75	80	128	238

【資料の活用】

この表の読み取りから、世界恐慌の各国への影響とその対策を考察することができる。例えば、「なぜドイツはアメリカ以上に恐慌の影響を受けたのか」「ソ連は世界恐慌の影響を全く受けていないのはなぜか」「日本がこの表中の資本主義国の中で最初に1929年の工業生産を越えたのはなぜか」などの問いかけからこの時代の各国の動向を考察することができる。

(2) 写真・絵画などのビジュアル資料の活用例

<インドの紙幣 >



【資料の活用】

多くの生徒はインドといえばインド人の住むところであり、インド人はヒन्दゥー教を信仰しているという素朴なイメージを持っている。そこで、インドの紙幣には15種類(英語とアラビアも文字を加えると17種類)の文字で金額が書かれていることに着目し、インドの多様性(多民族・多言語)を実感させる。

(3) 文字資料の活用例

<イギリス産業革命の原因に関する英仏の比較 >

多くの17・18世紀経済史の実証研究が、あらゆる点で英仏の等質性を説きはじめた。経済成長の点でフランスが特に劣っていたわけでもなく、農業技術が農業の生産性の点で「遅れ」をとっていたものでもなく、また、18世紀前半では、むしろ工業国といえるのはフランスだった・・・、というのである。その結果、産業革命の展開において、「なぜイギリスが最初だったのか」、という伝統的問題は、たんに「偶然」として片づけられる例さえみられるようになった。・・・イギリスとフランスの両国の立場が非常に異なったものになった最大の契機は、1763年にあった。・・・七年戦争の結果として、フランスがアメリカ大陸の領土を失ったことが、決定的であった。

【資料の活用】

教科書の記述と異なる資料を提示することにより、生徒の知的好奇心を刺激する。なぜ産業革命がイギリスで始まったのかを教科書の記述で学習した後、左記の資料を提示し教科書の記述と資料とを比較させることで、多面的多角的に歴史を見ることができ、歴史における様々な解釈の可能性を学習することができる。

- 4 日本史の教材研究の視点と資料の扱い

日本史は、世界史と比べて地域に素材が豊富に存在するので、これをどのように教材化するかが重要である。また、小学校以来の日本史学習の総決算としてより思考力を深め、日本史で学んだことが自らの生き方の指針となったり、国民としての自覚や態度を育成するような教材化をしたい。

1 史跡を訪ねる

(1) 愛知県内の歴史的素材を活用する

地域の歴史や先人の業績に触れさせることで、生徒に郷土に対する愛情を喚起することができる。その際の留意点としては、以下のことが挙げられる。

ア 教科書の記述と関連しているものに精選する。

イ 生徒が直接見ることや触れることのできるものに精選する。参考資料：「愛知の郷土史、偉人、祭り、伝統産業」(愛知エースネット<http://www.aichi-c.ed.jp/contents/syakai/index.html>)

(2) 博物館・郷土資料館を利用する

長期休業中の課題などとして、博物館・郷土資料館に行き、レポートさせると良い。民俗資料や農機具、生活道具などがあり、教科書に載っているものの「ホンモノ」あるいは模型を見ることができる。また、事前に図書やインターネットを通じて、調べたいことを確認させ、そのうえで学芸員に質問してくることを課すことも主体的学習を進めさせるうえで良い。

2 ビジュアル教材を活用する

テレビ番組、映画、スライド等の映像物を教材として活用することで生徒の関心を高めることができるが、その際の留意点としては、以下のことなどが挙げられる。

(1) 利用についての著作権に十分配慮する。

(2) 鑑賞のためのプリントなどを作り、視聴する視点を明確にして使う。

(3) テレビ番組や映画は、「歴史」そのものではなく、現在の視点での再構成・解釈が入っている。イメージをつかむのには有用であるが、間違った理解を生む可能性もある。

3 身近な人へのインタビューやアンケートを活用する

生徒にとっては「歴史」であることを、直接体験した人から「ナマ」の話として聞くことは、「歴史」は人間がつくっていることを直感させ、「歴史」を担う当事者意識や責任感を育てるうえで効果がある。長期休業中の課題として設定すると効果的である。

(1) 戦争体験、戦中・戦後の生活の比較...生徒の祖父母の世代の体験である。

(2) 「初めて我が家に が来た時」「オイルショック」...生徒の父母の世代の体験である。

4 討論授業、シミュレーション授業を積極的に取り入れる

「歴史的思考力を培い、国民としての自覚や国際社会に主体的に生きる資質を養う」ためには、主体的に判断する機会を日本史授業の中に設定する必要がある。歴史は、為政者や民衆の意識的・無意識的決断の連続により作られてきた。生徒に歴史上の人物の立場を与え、「あなただったらどうする」と問いかけることで、歴史から教訓も得られ、現在の自らの行動指針も得ることができる。

例えば、「あなたが、松平定信だったら、寛政の改革で何をすべきだったか?」「昭和恐慌を回避するにはどういう経済政策をとったら良かったのか?」「どの時点ならアメリカと戦争せずにすんだのか」など問いはたくさん立てられる。個人での調査やグループ研究を踏まえ、討論やシミュレーション学習をしたい。

5 日本史における資料の扱い

写真、図、表、グラフ、地図、史料などの資料の提示の仕方を工夫することが大切である。

(1) 写真やグラフを身近なものにたとえる

文化財の写真ではその大きさが想像しにくいものがある。例えば「鑑真和上像」(唐招提寺)の像高は80.1cmである。「腰の高さぐらいだな」の一言が生徒に「意外に小さい」との実感を与える。データを生かすためにも身近なもののサイズ(教室、校舎、グラウンド、体育館のサイズ等)を調べておくとよい。そうすれば、「大仏と校舎とどちらが大きいか」といった発問ができる。

グラフについても、例えば、「幕末の大坂における物価指数」のグラフを見せ、「このグラフの米の値上がりは、今でいうと120円のジュースが8年後に1200円になることを示している。」と説明すると、生活感覚に訴えることができる。

(2) 資料で実証する

教科書は歴史的資料に基づいて記述されているが、全ての資料が示されているわけではない。歴史を実証的に見る態度を育成するために、資料や原典を提示するのもよい。

例えば、教科書では高野長英の『戊戌夢物語』について、「幕府の鎖国政策を批判する内容であったため、高野長英が処罰されることとなった」と記述されている。『戊戌夢物語』の現代語訳を生徒に提示することで強い印象を与えることができる。

(3) 風刺画で議論させる

近代以降の風刺画・政治漫画には面白いものが多く、生徒の資料集にも採用されている。これらについては授業の場面で教師が内容を説明をするよりも生徒に何が描かれているのか説明させたり、議論させる方がよい。

(4) 数字を対比する

歴史的に関連性の無い数字を対比することにより思わぬ効果を生むことがある。例えば、「関ヶ原の戦い」の東西両軍の総動員兵力が約15万人とされている。同じく「天草・島原一揆(島原の乱)」の一揆軍、幕府軍の総動員兵力が約15万人とされており、この数字を比較することで「天草・島原一揆(島原の乱)」の幕府に与えた影響の大きさを理解させることができる。

(5) 地図を統合する

2枚の地図資料を統合することで思わぬ効果を生むことがある。例えば、日清戦争の主戦場図・日本軍の進路と日露戦争のそれとを同じ地図に統合させることで日本の大陸進出が視覚的に理解させることができる。また、江戸幕府初期の大名配置図と五街道を同じ地図に統合することで幕府の意図が視覚的に理解させることができる。

(6) 近代史の統計を表計算ソフトでグラフ化させ、考察させる

「軍事費の推移」「戦前の主要輸出品・輸入品」「太平洋戦争地域別戦没者数」等の近代史の統計を表計算ソフトを利用し、グラフを作成する。そこから歴史を考察させ、レポートを作成させる。教科「情報」での学習と関連させながら進めることができる。(参考:若菜初「日本史においてデータをグラフ化し、考察する授業」<http://www.cec.or.jp/kenkai/h12jirei/jirei2.html>)

- 5 地理の教材研究の視点と資料の扱い

歴史や公民科と比べて地理の授業の特色は、「地図を読む」「地図を作る」など体験しながら、それぞれの地域の特色（地域性）を理解するとともに地理的な見方や考え方が学べる点にある。生徒に「地図は楽しいものだ」「地図は利用価値のあるものだ」と思わせる授業を展開したい。

1 「地理的技能」について

地理を学習することで身に付く技能は、「地理情報活用技能」と「地図活用技能」とに大別される。

(1) 地理情報活用技能...地理に関する情報を収集したり、地理情報に加工したり、さらにそれを用いて地域の特色を説明する技能である。

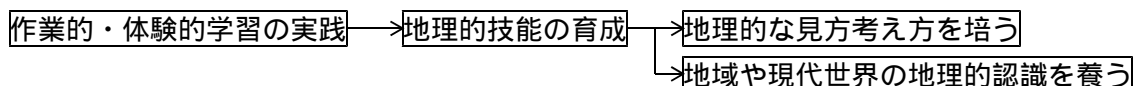
(2) 地図活用技能...地図を頼りに見知らぬ土地を歩く技能、地図帳に親しんで地名を調べる技能、地図を読み取る技能、地図化する技能、略地図を書く技能、などである。

これらの技能を計画的に授業に組み込むことで地理的な見方考え方が身に付く。

2 「地理的な見方考え方」について

(1) 「地理的な見方」とは、諸現象を位置や広がり（分布）として見ていこうとする見方。

(2) 「地理的な考え方」とは、「諸現象がなぜそこで見られるのか」を「地域」という枠組みで考察しようとする考え方。具体的には、「その現象は、そこでしか見られないのかどうか」を、他地域と比較関連させて考察したり、「その現象はいつ頃から始まったのか」を地域の変容の観点から考えること。従って、地理での学習は次のように図式化される。



3 地図を読み取る（読図）

地理の授業には必ず地図帳を持参させ、地図を見たり地理的な位置を確認したりする習慣を付けることが重要である。また、教師自身が日頃から地形図や地図帳に親しみ、旅行をしたり、地域理解を深める研修を行ったりすることが大切である。

4 地図を作る（地図化）

(1) 略地図を描かせる

身の周りの地域から世界地図まで大小さまざまなスケールの略地図を手早く、的確に描く練習を機会ある度にさせる。教師自身も地理的特徴をつかんだ地図が描けるようにしておく。

(2) コンピュータソフトを使った地図の作成

統計データなどの地理情報をコンピュータソフトウェアを使い、独自の主題図・分布図を作ることができる。塗りつぶしや記号、グラフ、等値線などの多様な表現方法があり、階級区分を変えることにより「地図を作ることの意義」「主題図の読図」を体験できる。

・大阪大学公衆衛生学研究室「むら」が提供するフリーソフトウェアのページ

(<http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/pbhel/www/mura/mura-j.html>)

・地理情報分析支援システム「MANDARA」(谷謙二作)(<http://www5c.biglobe.ne.jp/~mandara/>)

5 地理情報の収集と地理情報化

新聞やテレビ、雑誌や観光パンフレットの中の風景写真、紀行文、広告など地理情報として活用できるものがある。これらを教師が地理情報化して生徒に提示するだけでなく、生徒自身が地理情報化の技能が身に付くよう主体的な学習活動を設定することが大切である。

6 地理情報システム (GIS: Geographical Information Systems)

学習指導要領でも、「地図化することの有用性に気付かせ、それに関する技能を身に付けさせる」としており、衛星画像や空中写真、デジタル地図の活用やGISによって得られる地理情報に関心をもたせる工夫が必要である。名古屋市熱田区には、GIS会館があり、GISに関する様々な展示があり、体験もできる (<http://www.gis-kaikan.com/>)。

他にも、「教育GISフォーラム」「GISひろば」(日本建設情報総合センター)などの教育的なインターネットのウェブサイトもあるので、調べると良い。

7 地理における資料の入手

(1) 地形図、旧版地形図(コピー)の入手方法

地理の授業では、生徒が地形図を見ながら地形図の概要を学ぶことや、地形図の読図を行なうことが理想である。地形図の購入は、国土地理院刊行地図を取り扱っている書店で購入することが通常であるが国土地理院の外郭団体である(財)日本地図センターが行なっている通信販売を利用する方法もある。

また、明治期より現在まで刊行された地形図(旧版地形図)は、地域調査の基礎資料としたり集落や都市の発達の歴史を学習する手段として利用価値が高い。旧版地形図のコピーの入手は、国土地理院のホームページ (<http://www.gsi.go.jp/>) より、地形図の図歴データをみて、入手したい時期の地図を探し、手続きをとる。

(2) 空中写真の入手方法

空中写真は、地形図と同じように地域調査の基礎資料として利用価値が高い。カラー空中写真の場合は、ビジュアルで美しいので、授業の導入などに用いるのに適している。空中写真の入手は、日本地図センターのホームページ (<http://www.jmc.or.jp/>) で希望する撮影地域と年代のものがあるか確認し、通信販売で購入する。

(3) インターネットによる統計情報、画像資料などの入手

インターネット上に掲載されている世界各地の生活や文化に関する画像や文書、統計などの資料を収集、処理することを通じて「世界の生活・文化の地理的考察」を行うことができる。また、「市町村規模の地域」を地誌的にとらえる視点や方法を身に付ける学習を行う場合にも、インターネットを活用して、収集した画像、統計、読み物資料を基に地理的事象を読み取り、調べ、考察することによって、野外での観察や調査に代わる活動になる。

国土地理院や日本地図センターのホームページは、地理の授業で利用できるさまざまな情報を検索することができ、統計資料などをダウンロードすることも可能である。

ア 国土地理院 (<http://www.gsi.go.jp/>) のリンク集

【測量・地図】...地図・測量機関、関連する大学・学会、関連する博物館・図書館、専門学校

【ふるさと】...日本地図中から都道府県を選び、そこから市町村を選ぶ。

【官公庁】...中央官庁、外務省(大使館・領事館)。統計情報はダウンロードができる。

【マスコミ】...新聞社、通信社、テレビ局、ラジオ局、海外の放送局。

イ (財)日本地図センター (<http://www.jmc.or.jp/>) のリンク集

【国の機関】...国土交通省、国土地理院、海上保安庁海洋情報部、環境省、総務省統計局。

電子国土(日本全体の地図を詳細に閲覧可能)

【地方自治体】...全国の自治体でGISや防災面で先進的な仕事を行なっているサイト。

- 6 公民科の教材研究の視点と資料の扱い

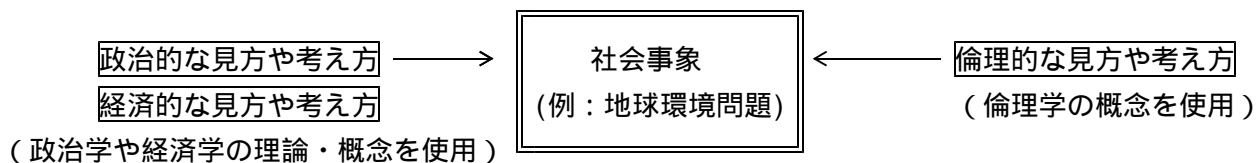
公民科では、課題追究学習が重視され、社会の諸事象に対して事実・根拠に基づいて「自分なりの見方や考え方」を身に付けることが求められている。教材研究を行うに当たっても、教材内容研究とともに、授業方法研究についても深めていく必要がある。

1 「見方や考え方」について

「倫理」「政治・経済」では、「倫理的な見方や考え方」や「政治についての基本的な見方や考え方」「経済についての基本的な見方や考え方」を身に付けることが求められている。

- (1) 「倫理的な見方や考え方」とは、物事を倫理という視点と枠組みからとらえ、考えることである。具体的には、何が善か、幸福かという問いを立て、どのような条件の場合に善といえるのかと考えたり、価値と価値の関連を考えたりすることである。
- (2) 「政治的な見方や考え方」とは、例えば、公共事業の選択や意思決定について、経済的視点、環境の視点ではなく、合意形成や調整、正当性などの視点でとらえることである。換言すれば、社会事象（政治現象）を政治学の概念や理論を活用することにより、その現象の構造や原因をよりよく説明できることを体験させることが政治的な見方や考え方を身に付けさせることになる。
- (3) 「経済的な見方や考え方」とは、社会事象を「価格」「需要」「所得」などの経済用語や概念を使い説明することであり、上記の公共事業を「費用と経済効果の関係」としてとらえることを指している。

「見方や考え方」を社会事象を分析するための枠組みや道具として具体的事例の調査や探究をさせながら身に付けさせることが大切である。



一方、「現代社会」では、課題追究学習を通して社会事象を倫理、社会、文化、政治、経済など様々な側面から主体的に分析・追究し、社会事象の持つ多面性に着目させたり、社会には様々な見方やいろいろな立場に立った考え方があることに気付かせたりすることが求められている。

2 公民科の資料の集め方

「見方や考え方」を身に付けさせるためには、具体的な事例や事象の分析や探究が必要であり、生徒に身近で興味深い資料を教材として収集しておくことが大切である。

- (1) 見て、触って分かる「モノ」...生徒自身に身近な問題として追体験させる上で効果がある。
【例】外国通貨、株券などの現物やレプリカ、博物館の記念品、役所などの届け出用紙など
- (2) 興味、関心を呼び起こし、引き付ける「モノ」...導入として利用すると効果的である。
【例】映画、音楽CD、雑誌、アニメ(漫画)、川柳など
- (3) 基本的なデータ...教科書掲載の資料と最新の資料を比較することで「変遷・変容」が分かる。
また、原典に当たることで、「資料」として加工される前の状況が分かる。
【例】『世界国勢図会』、『白書』、国際機関・政府・地方自治体発行のPR冊子など
- (4) 童謡、童話、絵本など...様々な生き方や考え方が表現されており、内容が深い。
- (5) 地名、習慣、祭り、しきたりなどの由来など...現実に生きてきた人々の知恵に触れ、自らが生きている社会の土台を考える。
- (6) 文化財に触れる...写真、絵画、彫刻、書物、器、道具などに触れることで、その内側に存在する先人の知恵に触れる。

3 公民科における資料の扱い

身近な情報・資料による新たな教材開発に当たっては、基礎的な専門書や原典にあたるなどして記述の真偽を確かめておくことが大切である。また、教育基本法の規定に違背しないよう慎重に配慮し、現代社会の諸問題に対する判断力の基礎を培いたい。

資料の活用に当たっては、生徒に「現実」を把握させるとともに、資料の「意味」するところを読み取り、「何が事実・真実か」「何を・なぜ学ぶのか」が理解できるよう、工夫を加えたものにしたい。

(1) 教科書の内容を踏まえた内容のものであるか

生徒に学習させる教育内容の資料として適当であるかを、よく吟味する。教科書の記述を裏付ける資料、教科書の内容を深化・発展させる資料、教科書と違った視点での資料などとして活用できる。学習指導要領や教科書の記述、生徒の実態や発達段階などを考慮する必要がある。

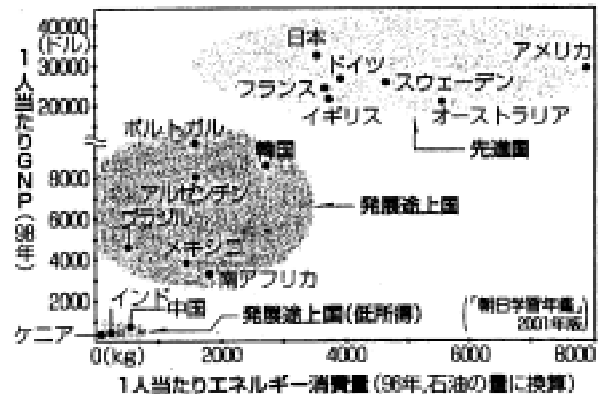
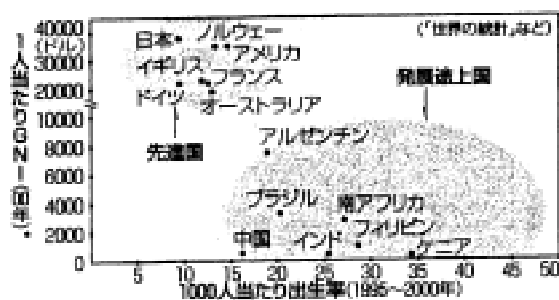
(2) 今を扱い、生徒にとって身近な資料であるか

できるだけ生徒にとってタイムリーで身近な資料の方が、興味や関心をもちやすい。

(3) 生徒が主体的に考え、「何を・なぜ学ぶのか」を理解できるものであるか

単純に「良い」「悪い」という選択を迫るのではなく、「なぜそうなるのか？」という理由を問うものや、複数の資料を示して考えさせるなどの工夫をしたい。また、討論を行うときに、様々な意見が出そうな資料がよい。

【具体例】次の二つの資料から、世界の抱える問題点を指摘（列挙）しなさい。



(4) 資料を読み解くための前提となる知識が身に付いているか

資料に関連する基礎知識の理解度を事前に調査し、基礎知識を解説することで、生徒の内容理解度が上がる。生徒も、資料を読み解くことができたという達成感を味わうことができる。

(5) 何のための資料・情報か

「誰が・何のために」作った資料や統計か、出典を確認しておく必要がある。複数の情報源に当たり、情報の信憑性を確かめられると良い。また、一つの資料でも、全く逆の解釈が成り立つ資料や統計もある。生徒のレベルに応じて、「メディア・リテラシー」を高める資料としても活用したい。